

研究ノート

鍋島家文庫における史料の存在形態

——「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」を例として——

清水雅代

はじめに

記録史料の収集・整理・保管・管理について、科学的に究明する史料管理の研究には、記録史料の発生形態や存在様式を解明する、史料認識の研究が不可欠である。

近世文書は、多くが史料群として伝来している。安藤正人氏は、記録史料群の構造を理解するために、①史料の属性（記録の内容・素材・形状・手段・様式）を理解すること、②個々の記録史料を記録史料群の中に位置づけて、その存在の意味を理解することが必要であるとされた^①。②について、笠谷和比古氏は、史料の存在の意味を理解することは、その作成と伝存のあり方を解明することである、との見解を示された^②。

佐賀県立図書館には、近世期に佐賀藩藩主であった鍋島家から、一九六三年に寄託を受けた藩政文書約三万三千点が保管されている。その内容は、藩主・支藩及びその家臣の年譜や系図、役職・施政・外交・軍事に関する史料、また、日記類・和漢籍・洋書を含む史料群である。

それらの整理・目録編成は、まず国書・漢籍・記録類に大別された後、当時の歴史資料整理規程によって進められ、一九八二年までに『鍋島家文庫目録』全三冊が刊行された^④。現在まで、多くの研究に供されてきたこ

ろであるが、記録史料学の観点からは、あまり検証されていない。

小稿では、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」という史料を例として、大名家で作成された個別史料が、どのような形で伝存しているかを明らかにする。そして、それが藩組織の中でどのような事案のもとに作成され、管理され、利用されてきたのかを考察する。

一、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」について

鍋島勝茂は、肥前国佐賀藩藩祖とされる鍋島直茂の嫡男で、天正八年（一五八〇）に生まれた。戦国期に肥前を治めていた龍造寺家の嫡男高房が、慶長十二年（一六〇七）に没したのち、その遺跡を継ぎ、佐賀藩初代藩主となった^⑤。鍋島忠直は、勝茂の嫡男として、慶長十八年（一六一三）に生まれた。寛永十二年（一六三五）、家督を継ぐ前に二十三才で急逝した^⑥。

本史料は、勝茂が忠直に対して、日常生活や、公儀、家中・家臣に接する際の心得を説いたもので、「覚」と記した後に十一ヶ条からなる一つ書きの条文が続く。日付は寛永八年極月十五日、信濃守（鍋島勝茂）より肥前守（鍋島忠直）宛てとなっている。

佐賀県立図書館所蔵坊所鍋島家資料に本史料があり、『佐賀県近世史料』

第八編（思想・文化編）第二卷に翻刻されている。⁷内容の一部を紹介すると、次のようなものである。

覚

一御城方并他所ニ而之坐躰、其外不断身持之嗜肝要ニ存候、若キ時惡敷沙汰を請候へハ、先様其批判不被取返物ニ候条、今五六年之内之嗜可為肝要之事

付、食受用方嗜之事

一各へ知人ニ相成候儀、差立たる衆之外、むさと不罷成様に可然候、其故ハ、先様それぞれニ無滞會^{ト、コリ}積可難成候、殊知人増候ハ、造作も可入越と存候、左候共我等手前一切不罷成候条、今度相改、右近・藏人書立を以詰料渡置候員数之外ニ差次候儀、曾而成間敷候間、万事其心得可為尤事

付、道之者以下之事

（略）

坊所鍋島家は姉川鍋島家の別称である。姉川鍋島家は、鍋島直茂の従兄弟清虎の男道虎（鍋島生三）⁸が姉川家を相続したもので、知行地の地名から、坊所鍋島家とも呼ばれる。

また、『佐賀県史料集成』古文書編第二十巻にも、成富家に伝存する本史料が、「鍋島勝茂覚書案」として翻刻されている。⁹成富家は、兵庫助茂安が直茂・勝茂に仕え、土木・治水に才能があり、重用された。¹⁰

前掲史料に傍線部で示した「右近・藏人」は姉川道虎の嫡子右近茂泰¹¹、成富茂安の養子藏人安利¹²のことである。鍋島忠直の年譜である「忠直公御

事跡」（鍋島報效会所蔵、佐賀県立図書館寄託、鍋島家文庫115―7・8）によると、姉川右近・成富藏人は、ともに忠直の御側役を勤めている。¹³このために、本史料が姉川（坊所）鍋島家・成富家に伝存しているものと推測できる。

次節以下では、本史料が鍋島家文庫にどのように伝存しているかを、詳細にみていくこととする。

なお、本文中で使用する文書名については、佐賀県立図書館で用いられている、「鍋島家文庫」・「坊所鍋島家資料」・「成富家文書」とした。

二、鍋島家文庫における異本

「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、鍋島報效会所蔵、佐賀県立図書館寄託鍋島家文庫（以下、鍋島家文庫）の史料群の中に、他の史料と合綴、または合写された冊子の形態で、現在判明しているところでは、八点が伝存している。それらを一覧に示したのが表1である。

表1から、合綴・合写された冊子の内容をみると、その類型は、おおよそ以下の三類型に分類できる。

①藩主の遺訓・教訓を合綴・合写したもの（表1、1・2・3・4）。

1は裏表紙に「東京麹町區」と記されていることから、明治期以降の写しである。2は表紙に「慶応二年寅仲春仲旬写」「於長崎神ノ島堂上宮ニ写堤久之允貞郷存」と記されている。また、家臣である堤家の蔵本であったことを示す「堤蔵書印」¹⁴があることから、慶応二年に長崎の神ノ島¹⁵で堤貞郷によつて書き写されたものと推測できる。3・4は、「文政七年申十二月朔日、写を以、貞丸様江御直二十左衛門より差上之候」の記載から、文政期

表 1 鍋島家文庫における「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」の異本

表題	形態	丁数	印	内容	備考
1 勝茂公ヨリ忠直公江之御書キ物 (銅015-1-9)	竪帳 27.1×19.1 二ツ綴 共紙表紙	9丁	印なし	①勝茂公ヨリ忠直公江之御書キ物 (寛永八年極月十五日) ②加州様御咄九ヶ條信州様御聞書 (十月十二日)	裏表紙に「東京廻町區 (略) 金丸清右衛門 (略)」と記載
2 御代々様御遣訓写 等 (銅063-13)	竪帳 26.1×18.3 四ツ目綴	29丁	鍋島家藏、 堤藏書印	①勝茂公ヨリ忠直公江之御遣訓 (寛永八年極月十五日) ②直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (十月十二日) ③治茂公ヨリ御家老僧又大組頭中江之御書附写 (安永五年子三月) ④貞丸様御附頭其外江被相渡置候御書附写 (文政七年申十一月十六日)	表紙に「四番」(朱書)、扉に「勝茂公御遣訓其外写全」、「校合相済」、「慶応二年寅仲春中旬写」、「於長崎神ノ島堂上宮二写、堤久之允貞郷存」等記載有り、又「御代々様御遣訓写等一冊」と記した付箋あり、朱字校正あり ②と1-②の内容は同じ
3 直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (銅063-17)	竪帳 26.4×18.4 四ツ目綴	29丁	清除所藏	①直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (十月十二日) ②勝茂公御教訓之写 (寛永八年極月十五日) ③貞丸様御附頭其外江被相渡置候書附写 (文政七年申十一月十六日)	扉に「御家之御教訓書」と記載、朱字校正あり ①の冒頭に「文政七年申十二月朔日写を以貞丸様江御直二十左衛門より差上之候事 (略)」と記す ②の冒頭に「文政七年申十二月十五日御取次 御附頭大塚丹弥故障之由二付屯濱野藏左衛門」を以写、御前様江差上之 (略)」と記す ③の末尾に「文政九年戌二月廿一日ヨリ若殿様御年寄田中李佑出府被仰付被差越候付、御当役御取次弥平左衛門殿也 ヨリ至佑江、為心得一覽有之候通被相達、御教訓之二冊并副書之一冊をも被相渡候処、拜見有之候旨二而差出相成候事」と記載あり
4 直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (銅063-28)	竪帳 26.4×18.2 四ツ目綴 「鍋島家藏」と印字の罪紙	16丁	印なし	①直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (十月十二日) ②勝茂公御教訓之写 (寛永八年極月十五日) ③貞丸様御附頭其外江被相渡置候書附写 (文政七年申十一月十六日)	表紙に「三番」(朱書)、朱字校正あり ①の冒頭に3-①と同文の記載あり ②の冒頭に3-②と同文の記載あり ③の末尾に3-③と同文の記載あり
5 経清年譜 (銅212-30)	竪帳 26.3×18.5 四ツ目綴 「鍋島家藏」と印字の罪紙	94丁	印なし	①経清年譜 ②大木氏傳記 (上、中、下) ③直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写 (十月十二日) ④勝茂公御教訓之写 (寛永八年極月十五日) ⑤貞丸様御附頭其外江被相渡置候書附写 (文政七年申十一月十六日)	③の冒頭に「御家御教訓書 申十一月廿二日 古賀写」と朱字で記した挟み紙あり ③の冒頭に3-①と同文の記載あり ④の冒頭に3-②と同文の記載あり ⑤の末尾に3-③と同文の記載あり 表紙に「十三番」(墨書)、表紙題せんに「直茂公御書其外写 鍋島周防」の記載あり ①「弓」、「鉄炮」、「玉薬」等についての覚 ②「かみの嶋小屋懸」、「深堀早船」、「長崎御番」等についての覚 ③「馬廻り使前」、「陸小姓」等についての覚 ④「切米」についての覚 ⑤「駿州比中御煩様子」についての覚 ⑥「与内之儀」、「馬廻り」、「弓鉄炮」等についての定 ⑦の冒頭に「右近、茂泰、忠直公御附御家老被仰付置候二付、御書付御写被相渡置候由候事、天保十二年御什物方に差出候節付紙」とあり ⑧組織成人員の一覧
6 直茂公御書其外写 (銅326-128)	竪帳 26.5×18.4 四ツ目綴	15丁	印なし	①覚 (慶長四年正月廿七日、信濃守御書判、平五郎、生三宛) ②覚 (六月十六日、信守御居判) ③「覚」(十月十五日、信守御書判、鍋島縫殿助) ④覚 (慶長拾貳年霜月十九日、信御居判、生三) ⑤覚 (三月廿日、信濃守、加州様進覺) ⑥定 (寛永五年霜月朔日、信濃守御書判、鍋島右近允宛) ⑦覚 (寛永八年極月十五日、信濃守より肥前守宛) ⑧鍋島主税組 (二月十一日、綱茂御書判)	

表題	形態	丁数	印	内容	備考
7 直茂公御書其外写 (銅326-129)	縦帳 26.1×18.6 四ツ目綴 仮表紙有り	29丁	鍋島家蔵	①寛 (慶長四年正月廿七日、信濃守御書判、平五郎・生三宛) ②寛 (六月十六日、信守御居判) ③ [寛] (十月十五日、信守御書判、鍋島縫殿助) ④寛 (慶長拾貳年霜月十九日、信濃守判、生三) ⑤寛 (三月廿日、信濃守、加州様進覽) ⑥定 (寛永五年霜月朔日、信濃守御書判、鍋島右近九宛) ⑦寛 (寛永八年極月十五日、信濃守より肥前守宛) ⑧鍋島主税組 (二月十一日、銅茂御書判)	表紙題せんに「直茂公御書其外写 鍋島周防」と記載 ①から⑧の内容は6と同じ
8 五常五倫名義 (銅91-82)	縦帳 26.4×19.5 四ツ目綴	79丁	鍋島家蔵 清陰	①五常五倫名義 ②臨民法要 (元文五庚申) ③茂里壁書 (慶長十一年七月八日) ④抱貫書 ⑤直茂公御壁書二十一ヶ条 ⑥勝茂公ヨリ忠直公江之御書附 (寛永八年極月十五日) ⑦加州様御咄九ヶ条信州様御聞書 (十月十二日) ⑧白川候密語	表紙題箋に「五常五倫名義、臨民法要、茂里壁書、抱貫書、神君御壁書、從泰盛公興國公興輪公江御墨附、白川候密語」とあり、表紙見返しに「五常五倫名義一冊」と記した付箋あり、朱字の校正あり、 ①室鳩巢著 五常名義 五倫名義 附大学詠歌、附病中のすさび ②蓮者、堤文藏盛章、江頭十平近義、福地七之助元雅 ④「上泉武藏守」の記載あり ⑤註一冊作「元禄五年壬申一之日 (略)」の記載あり

註1、表題の欄に掲げた史料により作成。(銅)は鍋島報效会所蔵、佐賀県立図書館寄託鍋島家文庫を示す。

註2「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は灰色で示した。

註3、人物註〔龍造寺鍋島系図〕銅111-12、「御家老系図」銅141-8、「系図」銅211-9、「系図」銅211-12による

加州様…佐賀本藩初代鍋島直茂、法名は日春宗智

信州様…佐賀本藩初代鍋島勝茂、直茂嫡男、慶長十二年家督、法名は泰盛院殿

忠直公…鍋島勝茂嫡男、肥前守、寛永十二年家督を継がずに卒、法名は興国院殿

光茂公…佐賀本藩二代藩主鍋島光茂、忠直嫡男、丹後守、明暦三年家督、法名は興輪院殿

綱茂…佐賀本藩三代藩主、光茂嫡男、信濃守、元禄八年家督、法名は玄楽院殿

治茂公…佐賀本藩八代藩主、父は五代藩主宗茂、肥前守、明和七年家督、法名は泰国院殿

貞丸様…佐賀本藩十代藩主鍋島直正の幼名、信濃守・肥前守、天保元年家督、閑叟と号す

統清…大木兵部丞統清、貞丸後岡山門郡大木城主大木知光の子、鍋島直茂・勝茂に近侍

平五郎・茂里…横居鍋島家 (家老) 主木茂里、初め鍋島直茂の養子

鍋島生三…姉川鍋島家 (家老)、周防守清庵 (鍋島直茂の従兄弟) の男

鍋島縫殿助、鍋島右近…姉川鍋島家・茂泰、生三の男、勝茂嫡男忠直の御年寄

鍋島周防…姉川鍋島家・茂郷、文化四年家督、文政八年家老加判

上泉武藏守…上泉貞綱、新陰流の祖、「抱貫書」はその兵法の法度を記したものとされる

一冊…石田一鼎、実名は安左衛門宣之、勝茂・光茂に近侍、「要鑑抄」、「泰盛公 (龍造寺隆信) 御年譜」、「梅山遺稿」等の編著者

に貞丸 (佐賀藩十代藩主鍋島直正の幼名) に提出するために書き写されたものと考えられる。3には、佐賀藩親類同格家の須古鍋島家の所蔵であったことを示す「清陰所蔵」印がある。

②姉川 (坊所) 鍋島家に伝来する史料を合綴・合写したもの (表1、6・

7)。

6・7は、鍋島勝茂から姉川鍋島家に宛てた書付の写しなど七点と、鍋島綱茂 (佐賀藩三代藩主) 時代の写し一点を含む。6・7に合綴されている本史料には、「天保十一年御什物方へ差出」と記載があることから、天保

十一年（一八四〇）に、姉川鍋島家から、佐賀藩の記録類を管理した御什物方¹⁶へ提出されたものとわかる。二冊の内容は、ほぼ同じである。

③著作、家臣の家譜などとともに藩主の遺訓・教訓を合綴・合写したものの（表1、5・8）。

5は鍋島直茂・勝茂の重臣であった大木兵部丞統清の年譜、大木氏の家譜に加えて、直茂や勝茂の遺訓・教訓を記した史料を含んでいる。8は、近世中期の儒学者室鳩巢の著作である「五常五倫名義」¹⁷や、新陰流の祖上泉信綱の兵法書とされる「恒貫書」などとともに、直茂・勝茂の遺訓・教訓を合綴している。なお、8にも、前掲の須古鍋島家を示す「清陰」印がある。

以上のことから、佐賀県立図書館寄託の鍋島家文庫の史料群には、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」という個別の史料が、機能ごとに三つの類型にわかれて、合綴・合写された形態で伝存している。また、料紙の違いや印章、表紙の記載などを考え合わせると、作成された場所や年代は様々であったことがわかる。

三、年譜編纂資料としての利用

『勝茂公譜考補』は、佐賀藩十代藩主鍋島直正が、初代藩主勝茂の年譜である『勝茂公譜』の内容の増補・考証を命じて、編纂されたものである¹⁸。その寛永七年（一六三〇）の記事に、「十二月、忠直公へ公ヨリ、覚書ヲ以御教訓ノ御書をツカハサル、其文ニ曰 姉川家差出」として、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」が引用されている¹⁹。

また、前掲の『忠直公御事跡』にも、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」が

引用されている。鍋島家文庫には、左に記した五点の史料があり、いずれも「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」が引用されている。

『勝茂公譜考補』

①鍋島家文庫113―10、第四卷（全十三冊、第三巻は欠本）、臙脂色の罫線の罫紙、印なし。

②鍋島家文庫113―11、第四卷（全十四冊）、「侯爵鍋島家蔵」・「清陰所蔵」の印あり。

③鍋島家文庫113―62、第四卷（全十三冊）、臙脂色の罫線の罫紙、「御什物方」の印あり。

『忠直公御事跡』

①鍋島家文庫115―7（一冊）、「鍋島家蔵」・「堤蔵書印」の印あり。

表紙に朱書「四番」と記載あり。

②鍋島家文庫115―8（一冊）、「鍋島家蔵」と印字された罫紙。印なし。

『勝茂公譜考補』や『忠直公御事跡』は、ともに藩の記録や諸家に残る伝記などを典拠として編纂されており、その出典が本文に記されている。『勝茂公譜考補』では、前掲のように、姉川（坊所）鍋島家からの差出を出典として、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」を引用している（『忠直公御事跡』では、当該部分の出典は明記されていない）。

表2は、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」が引用されている『勝茂公譜考補』第四巻と『忠直公御事跡』に、出典として記された資料を示したものである。

表2によると、『勝茂公譜考補』・『忠直公御事跡』の編纂には、『葉隠』・『焼残反故』²⁰・『勝茂公御年譜』などの編著、姉川家・鍋島栄太郎家・多久家

表2『勝茂公譜考補』第四巻・『忠直公御事跡』の出典

『勝茂公譜考補』第四巻の出典		『忠直公御事跡』の出典	
資料名		資料名	
諫早差出		勝茂公御年譜	
往古御普請記		御霊簿	
水江事略		焼残反故	
深堀戦功記・勝屋戦功記		御当用四番御懸硯之内	
中野三代集		後ノ中橋又四郎存書き之内	
姉川家差出		多久家差出 多久家書き物	
長尾山年譜		九番御懸硯ニノ印	
大木戦功記		鍋島栄太郎書出	
葉隠		明和九年鍋島栄太郎家ヨリ書出候御書き物之内	
寛永行幸記		御筆筒入らノ印	
系図・略系図		十七番御懸硯	
寛明事跡録		御筆筒入	
山内旧記		直次郎殿家より出候書付	
村田差出		御筆筒入へノ印	
彦山御造営神変記		諫懲記之内	
孫平太殿記		深堀戦功記之内	
後藤戦功記		御什物方日記抜之内	
嬉野差出		日峯様二百年御年祭ニ付蓮池家来大園謙助ヨリ差出系図	
多久家書		御筆筒入ヌノ印	
石尾系図・馬渡系図		賢崇寺書出	
辻系図・田尻系図		葉隠義之巻	
加々良系図・内田系図		葉隠智之巻	
武富家伝			
英彦山記録			
山城殿差出			
成富家譜・成富戦功記			
焼残反故			
水町系図			
忠直公御事跡			
御親類始大概			
寶乗院差出			
旧記			

註、『佐賀県近世史料』第一編第二巻所収の『勝茂公譜考補』第四巻、『忠直公御事跡』（鍋島報効会所蔵、佐賀県立図書館寄託、鍋島家文庫115-7、同115-8）により作成。

などの家臣家の差出、系図や戦功期が利用されている。さらに『忠直公御事跡』の出典資料には、「御当用四番御懸硯之内」・「御筆筒入らノ印」などがあり、藩内で整理され、保管されていたと考えられる資料を利用していることがわかる。

このように、佐賀藩では、編著物とともに、家臣家からの差出、系図、家譜、戦功記などを利用して、年譜や年譜考補の編纂を実地したのである。

四、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」の異文照合

第二・三節で述べたように、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、鍋島家文庫史料群の中に、個別史料として合綴・合写されているものが八点、年譜や年譜考補に引用資料とされているものが五点伝存している。「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、家臣である坊所（姉川）鍋島家資料や、成富家文書に伝存するものを含めると、機能や様式の異なる十五点が伝存していることになる。

それぞれを詳細に読み比べてみると、細部において文言の違いがある。表3は、十五点の「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」の異なる文言を照合したものである。表3から、主な異文の箇所を検討してみよう。

①「右近・藏人」

表3の3・10は、「綾部右近」・「成富藏人」と記されており、姓が記された系統と、記されていない系統がある。なお「綾部」は「姉川」の誤記である。3・10はその他の箇所でも一致した記載が多く、同系統と考えられる。4は、当該箇所にも、「綾部」「成富」と朱字校正を加えている。この校正は、3・10の系統を典拠として行われたものであろう。

②「差引之儀有之共」「思慮を存」「虚実令校量」

表3の3・5・6・7・10は、「差引之儀有之共」の箇所が「差引之儀」「有之共」「脱落」と記され、「思慮を存」の部分が脱落している。また、「虚実令校量」が「虚実令推量」と記される。

③「至 公儀」

表3の5・6・7は「至 公儀」が、「重 公儀」と、記される。②で述

表3 「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」の異文照合

1	坊所鍋島家資料	先様其批判	右近・藏人	天下之集にて	差引之儀有之共	人之譏	申にくき物二候間	思慮を存
2	成富家文書	先様其批判	右近・藏人	天下之集二而	差引之儀有之共	人之譏	申にくき物二候間	思慮存
3	勝茂公ヨリ忠直公江之御書キ物	先様之批判	綾部右近・成富藏人※1	天下之集場二而	差引之義	人之儀	申悪者二候間	(脱)
4	御代々様御遺訓写等	先様の批判	「綾部」右近・「成富」藏人※2	天下之集二にて	差引之義有之候共	人之譏り	申悪き物二候間	思慮を存じ
5	直茂公御咄之趣勝茂公…	先様之批判	右近・藏人	天下の集にて	差引の儀	人の譏	申悪き者二候間	(脱)
6	直茂公御咄之趣勝茂公…	先様之批判	右近・藏人	天下の集にて	差引の儀	人の譏り	申悪き者二候間	(脱)
7	統清年譜	先様之批判	右近・藏人	天下の集二にて	差引之義	人の譏	申悪き者二候間	(脱)
8	直茂公御書其外写	先様其批判	右近・藏人	天下之集いゝて※4	差引之儀有之共	人之譏	申にくき物二候間	思慮を存
9	直茂公御書其外写	先様其批判	右近・藏人	天下之集いゝて	差引之儀有之共	人之譏	申にくき物二候間	思慮を存
10	五常五倫名義	先様之批判	綾部右近・成富藏人※3	天下之集二而	差引之儀	人之儀	申悪キ者二候間	(脱)
11	勝茂公譜考補	先様其批判	右近・藏人	天下之集二而	差引之義有之共	人之譏	申悪キ物二候間	思慮を存
12	勝茂公譜考補	先様其批判	右近・藏人	天下之集二而	差引之儀有之共	人之譏	申悪キ物二候間	思慮を存
13	勝茂公譜考補	先様其批判	右近・藏人	天下之集二而	差引之義有之共	人之譏	申悪キ物二候間	思慮を存
14	忠直公御事跡	先様其批判	右近・藏人	天下之集	差引之義有之候共	人之義	申にくき物二候間	思慮を存
15	忠直公御事跡	先様其批判	右近・藏人	天下之集	差引之義有之候共	人之譏	申にくき物二候間	思慮を存

1	坊所鍋島家資料	虚実令校量	至 公儀
2	成富家文書	虚実令校量	至 公儀
3	勝茂公ヨリ忠直公江之御書キ物	虚実を令推量	至 公儀
4	御代々様御遺訓写等	虚実令推量	至 公儀
5	直茂公御咄之趣勝茂公…	虚実令推量	重 公儀
6	直茂公御咄之趣勝茂公…	虚実令推量	重 公儀
7	統清年譜	虚実令推量	重 公儀
8	直茂公御書其外写	虚実令校量	至 公儀
9	直茂公御書其外写	虚実令校量	至 公儀
10	五常五倫名義	虚実之令推量	至 公儀
11	勝茂公譜考補	虚実令校量	至 公儀
12	勝茂公譜考補	虚実令校量	至 公儀
13	勝茂公譜考補	虚実令校量	至 公儀
14	忠直公御事跡	虚実之校量	至 公儀
15	忠直公御事跡	虚実校量	於 公儀

註1、表3で使用した史料は以下の通りである。

1…「覚（勝茂公ヨリ忠直公江之御書）」『佐賀県近世史料』第八編第二巻所収、佐賀県立図書館所蔵坊所鍋島家資料、坊326「鍋島信濃守勝茂覚書案」

2…「鍋島勝茂覚書案」『佐賀県史料集成』第二十巻所収成富家文書

3…鍋島報效会所蔵佐賀県立図書館寄託鍋島家文庫（以下の所蔵同じ）鍋015、1-9

4…鍋063-13

5…鍋063-17「直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写」

6…鍋063-28「直茂公御咄之趣勝茂公御書取二而光茂公江被進候御教訓之写」

7…鍋212-30 8…鍋326-128 9…鍋326-129 10…鍋991-82

11…鍋113-10 12…鍋113-11 13…鍋113-62 14…鍋115-7

15…鍋115-8

註2、※1・※2・※3の綾部右近は姉川右近の誤り。※2の「綾部」、「成富」は朱字。

註3、※4の「いゝて」に朱字で「本ノマヽ」の傍注あり。

註4、鍋063-17・鍋063-28・鍋212-30は六箇条目冒頭の「人之以為を可存当儀肝要二候、諸篇ニ付差合候義、就中」の部分脱。

註5、照合した異文は、1の坊所鍋島家資料「覚」（「勝茂公ヨリ忠直公江之御書付」『佐賀県近世史料』第八編第二巻所収）ではゴチックで示した箇所である。

「先様其批判」

一御城方并他所二而之坐躰、其外不断身持之嗜肝要二存候、若キ時悪敷沙汰を請候へハ、先様其批判不被取返物二候条（略）

「右近・藏人」

一各へ知人ニ相成候儀、差立たる衆之外、むさと不罷成様に可然候、（略）今度相改、右近・藏人書立を以詰料渡置候員数之外ニ差次候儀、曾而成間敷候間（略）

「天下之集にて」

一物見宮参之儀、下々物からかひ其外悪事之根元二候条、堅停止可為肝要候、自然、六借儀出来候てよりは、天下之集にて批判外間を失事二候（略）

「差引之儀有之共」

一其方母方より自然他方へ之差図、又は家中之者ニ至而之差引之儀有之共、女儀にて相違之事而已たるへく候条（略）

「人之譏」「申にくき物二候間」「思慮を存」

一人之以為を可存當儀肝要二候、（略）就中人之気ニ不合儀、又ハ其身ニ至而も人之譏を不受様ニ（略）其方へ異見可申儀自然有之刻、我等としても時々ニハ申にくき物二候間、思慮を存（略）

「虚実令校量」

一若キ主人へハ家中之者として傍輩之儀を譏言申、其外色々之儀を申物二候間、得其意、虚実令校量、又ハ善惡之儀も分別仕候上、信用可被申候

「至 公儀」

一至 公儀、其方別筋より御奉公可仕条有之間敷と存候、然時ハ御重恩を不致忘却、自然之刻は無二御用ニ罷立覚悟（略）

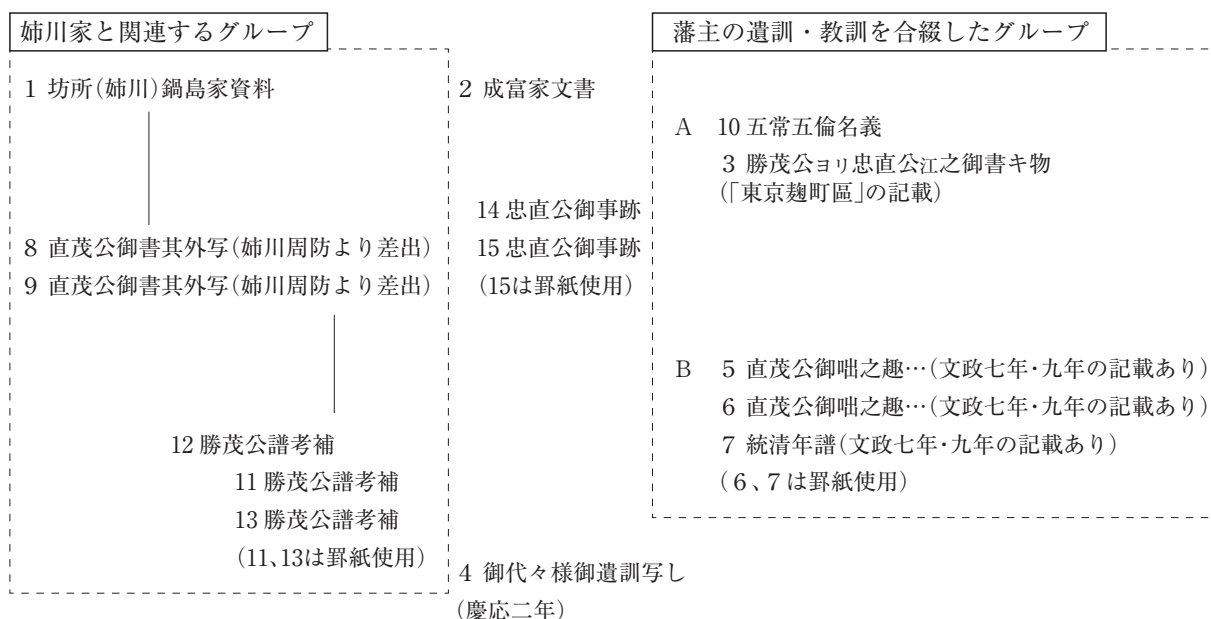


図1 「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」の系統図

べたことと合わせて考察すると、5・6・7は同系統と考えられる。

以上のような観点から、表3をみていくと、坊所(姉川)鍋島家資料、成富家文書・鍋島家文庫に伝存する十五点の「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、大きく二つの系統にわかれることがわかる。それを示すと図1のようになる。

一つの系統は、姉川(坊所)鍋島家から派生したグループである。1・8・9・11・12・13は、文言の差異が殆どない。8・9は姉川家からの差出、またはその写しである。「勝茂公譜考補」は、姉川家差出を引用している。11・12・13の『勝茂公譜考補』は『勝茂公譜』の補遺として、天保十四年に編纂された。⁽²³⁾ 8・9には、「天保十一年、御什物方に差出」とあり、年譜考補編纂のために、姉川(坊所)鍋島家から藩へ提出されたもの(またはその写し)と考える。11・13は罫紙が使用されており、作成年代は、12が古いと考えられる。

もう一つの系統は、藩主の遺訓・教訓を合綴した、またはそれらを含むグループである。このグループの中で、さらに二つの系統がある。そのうちAは3・10の系統である。3・10は文言に一致する箇所が多い。3には、裏表紙に「東京麹町區」と記載されており、明治以降の写しと考えられる。Bは、5・6・7の系統である。5・6・7も、殆ど文言に差異がない。6・7は、「鍋島家蔵」の印字がある罫紙が使用されており、これらの作成年代を5より後と考えると、5の系統から6・7へ写されたことになる。

なお、2・4・14・15については、異文照合をみるかぎりでは、前者のグループに近いと考えられるが、明確な位置づけは出来なかった。2の成富家文書は、1の坊所(姉川)鍋島家資料と殆ど文言に違いはない。14・15の『忠直公御事跡』は、第三節表2によると『勝茂公譜考補』の出典と

して記載されているので、その成立は、『勝茂公譜考補』より早いことがわかるが、何を出典としているのかは確定出来ない。4については、その内容は藩主の遺訓・教訓を合綴したものであるが、文言は前者のグループに近い。しかし、後者のグループの3・10の系統本と照合され、校正されたと考えられる。

おわりに

小稿では、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」という個別史料が、鍋島家文庫の史料群のなかで、どのように伝来してきたかを考察してきた。すなわち、「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、まず藩主であった鍋島勝茂のもとで作成されたものが、本史料の宛所である鍋島忠直の家臣であった姉川（坊所）鍋島家・成富家に伝来した。姉川鍋島家に伝来したものは、藩に差出されて年譜考補の編纂に利用された。また、本史料は、藩主の遺訓・教訓としてとりまとめられ、合綴・合写されて鍋島家文庫に伝存しているのである。

笠谷和比古氏は、大名家文書は、幕府や朝廷、他大名・家臣などとの関係のなかで、その活動をめぐって作成され、大名（藩主）家に帰属する形で伝存する「藩侯の文書」と、藩内統治の活動によって作成され、藩庁各部局に伝存する「藩庁の文書」に大別されるとの見解を示された。²⁴「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」は、藩主と家臣との関係のなかで作成された文書が、大名家に帰属し伝存していく一つの事例を示している。

佐賀県立図書館では、『佐賀県近世史料』を刊行している。アーカイブズの公開として史料を翻刻する際に、史料の発生から伝存に至る過程を理解

することは、何を底本とするか、どのように異本照合をするかを決定する手がかりとなる。今後は、印章や料紙、表紙の文字などの分析を加え、さらに藩組織のなかでどのように文書が管理されていたのかを解明する必要がある。

【註】

- (1) 安藤正人『記録史料学と現代―アーカイブズの科学をめざして―』、吉川弘文館、一九九八年。第一章一参照。
- (2) 笠谷和比古『近世武家文書の研究』、財団法人政法大学出版局、一九九八年。序章四参照。
- (3) 村山和彦編『佐賀県立図書館所蔵鍋島家文庫目録（鍋島直泰氏寄託）郷土資料編凡例（一九八〇年）』。
- (4) 前掲註の郷土資料編に続いて、一般資料（和書漢籍）編（常吉眞佐志編、一九八一年）、索引編（常吉眞佐志編、一九八二年）が刊行された。
- (5) 「龍造寺鍋島系図」鍋島報効会所蔵、佐賀県立図書館寄託、鍋島家文庫111-12（以下鍋島家文庫と記す）。鍋島家は、戦国期に肥前を平定していた龍造寺隆信の死後、龍造寺家の家臣団を掌握し領国を統治して、佐賀藩の成立に至る（佐賀県史編さん委員会編『佐賀県史』上巻中世三、一九六八年、佐賀市史編さん委員会編『佐賀市史』第一巻五、一九七七年、藤野保編『佐賀藩の総合研究―藩制の成立と構造―』本編第一章第一節、吉川弘文館、一九八一年）。龍造寺高房は隆信の孫にあたる。
- (6) 前掲「龍造寺鍋島系図」。
- (7) 「鍋島信濃守勝茂覚書案」佐賀県立図書館所蔵、坊所鍋島家資料坊326。形状は卷子で、タテ三七センチメートル、見返しは長さ二一・五センチメートル、本紙の長さ三一・六センチメートル、印なし。なお本史料の表題は原本では「覚」であるが、本稿では、『佐賀県近世史料』に翻刻する際用いた「勝茂公ヨリ忠直公江之御書附」とする（佐賀県立図書館編『佐賀県近世史料』第八編第二巻所収、二〇〇六年）。
- (8) 「御家老系図」鍋島家文庫141-8。佐賀県立図書館編『佐賀県史料集成』古文

書編第十一卷、坊所鍋島家文書解題（一九八〇年）。「寛永五年惣着到」（鍋島家文庫331—1）によると、姉川右近允は三七七九石であった。享和元年（一八〇一）茂徂の時、家老加判（御親類始御家老迄家々之大概）鍋島家文庫140—2（）。坊所は現在、佐賀県三養基郡上峰町坊所（平凡社『佐賀県の地名』、一九八〇年）。

(9) 佐賀県立図書館編『佐賀県史料集成』古文書編第二十卷（一九七九年）所収。

(10) 「大蔵姓成富家譜」鍋島家文庫212—52。前掲の寛永五年の着到帳によると、成富兵庫助は三二〇〇石であった。

(11) 前掲「御家老系図」。

(12) 「系図」ナの部分、鍋島家文庫211—10。

(13) 「忠直公御事跡」（鍋島家文庫115—7・同115—8）に、つぎのような記載がある。

公御年寄 鍋島右近 後縫殿助茂泰
生三 倅

葉隠二公御側成富五郎兵衛と有之候ハ当藏人ニ相当リ候カ

成富藏人

(14) 鍋島家文庫の史料には、「鍋島家蔵」、「侯爵鍋島家蔵」、「永田町鍋島家蔵」のように鍋島家蔵であることを示す印章の他、註記(16)の御什物方の記録類には、「御什物方」印が押印されている。又「堤蔵書印」は個人蔵であることを示すもので、「清陰」「清陰所蔵」は佐賀藩親類同格家の須古鍋島家（龍造寺隆信の弟信周を祖とする）の所蔵を示す印章である。

(15) 長崎港外の佐賀藩領の島（現在長崎市神ノ島町）。鍋島直正は、長崎防備のため、伊王島とともに神ノ島に砲台を築いた（前掲『佐賀市史』第二卷、五五三—五六〇頁）。

(16) 佐賀藩の記録や道具類を保管していた役所。天保六年（一八三五）に御什物方のあった二の丸が全焼し、記録類が散逸した（小宮睦之、前掲『佐賀県近世史料』第一編第二卷解題、一九九四年）。

(17) 『国書総目録』によると、『五常五倫名義』は、享保八年（一七二三）成立。『五常名義』と『五倫名義』から成り、『大学詠歌』『病中のすさび』を付す、とある（鍋島家文庫本もこの構成になっている）。なお、『大学詠歌』・『病中須佐美』は、ともに『甘雨亭叢書』別集にも収録されている。

(18) 小宮睦之、前掲『佐賀県近世史料』第一編第二卷解題。

(19) 「勝茂公譜考補」第四卷（前掲『佐賀県近世史料』第一編第二卷所収、三七七頁）。

(20) 「焼残反故」は、小川俊方によって享保九年（一七二四）に編纂された。前掲『佐賀県近世史料』第八編第三卷所収、二〇〇七年。高野信治による同書解題参照。

(21) 鍋島栄太郎は、姉川鍋島家茂徂、安永三年（一七七四）家督、文化四年（一八〇七）卒（『御家老系図』鍋島家文庫141—8）。多久家は、龍造寺隆信の弟長信を祖とする親類同格家。同じく表2にみえる「直次郎殿」とは、白石鍋島家（親類家、勝茂男直弘を祖とする）直賢、宝暦十一年（一七六一）出生、文化四年（一八〇七）卒（『御親類系図』同141—23）。

(22) 掛（懸）硯方とは、藩財政の運用に関わる役所の一つである。佐賀藩では、小物成方収入は掛硯方に納められ、物成収入による一般会計とは分けられていた（前掲『佐賀市史』第二卷七九頁、木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』、九州大学出版会、一九九七年、一六—二二頁、二三—二四四頁参照）。鍋島家文庫には「御掛硯入込手頭控」（鍋093—2）という冊子がある。それによると、「御掛硯黒塗引出」、「仁筆笥四段」、「坤桐筆笥」など保管場所を示す記載と「公迎之部」、「御家御連統之部」「雅道之部」「武門之部」など分類を示す記載がみえる。

(23) 小宮睦之、前掲『佐賀県近世史料』第一編第二卷解題。

(24) 笠谷和比古、前掲『近世武家文書の研究』。第四章二参照。

本稿は、国文学研究資料館平成二十一年度アーカイブズカレッジ短期コースの修了論文に加筆・修正を加えたものである。本稿作成のために、佐賀県立図書館近世資料編さん室前室長大園隆二郎氏、同室碓美也子氏、志波深雪氏に多くのご教授を賜りました。厚く御礼申し上げます。

（佐賀県立図書館近世資料編さん室嘱託）